

教職支援室便り (6月号)

令和3年 6月11日 (金)

文責：教職支援室 曾我文敏

☎0985-20-4808

教員採用選考試験 (第一次試験) 近づく

教員採用選考試験 (第一次試験) が近づいてきました。すでに、全国各自治体の実施要項等が公表され、6月下旬から7月下旬にかけて、第一次試験が行われます。九州各県市の自治体では、7月10日 (土)、11日 (日) に実施される予定です。コロナウィルスの影響も心配されますが、受験者の皆さんには、目標に向かって全力で取り組んでほしいと思います。

なお、九州各県市及び本学の学生の皆さんが受験する自治体の、校種等、採用予定数、一次試験の内容について、下欄に掲載します。

自治体	校種等	採用予定数	一次試験の内容
宮崎県	小学校	205名	筆記試験「教職教養、教科専門」 実技試験「各校種英語受験者：英語リスニング」 「小学校：体育実技」
	小学校英語	5名	
	中学校英語	11名	
	高等学校英語	5名	
大分県	小学校	200名	筆記試験「教職教養、一般教養、教科専門」 実技試験「英語リスニング」
	中学校英語	20名	
長崎県	小学校	235名	筆記試験「教職教養、一般教養、教科専門」 実技試験「英語会話テスト」
	中学校英語	11名	
福岡県	小学校	600名	筆記試験「教職教養、一般教養、教科専門」 実技試験「英語リスニング」
	中学校英語	40名	
福岡市	小学校	280名	筆記試験「教職教養、一般教養、教科専門」
	中学校英語	24名	
北九州市	小学校	140名	筆記試験「教職教養、一般教養、教科専門」 実技試験「英語リスニング」
	中学校英語	5名	
鹿児島県	小学校	280名	筆記試験「教職教養、一般教養、教科専門」
	中学校英語	20名	
佐賀県	小学校	190名	筆記試験「教職教養、一般教養、教科専門」 実技試験「英語リスニング」
	中学校英語	16名	
熊本県	小学校	180名	筆記試験「教職教養、教科専門」 実技試験「英語リスニング」
	中学校英語	13名	

熊本市	小学校	145名	筆記試験「教職教養、教科専門」 実技試験「英語リスニング」
	中学校英語	10名	
沖縄県	小学校	200名	筆記試験「教職教養、一般教養、教科専門」
	中学校教諭	100名	
静岡県	中学校教諭	130名	筆記試験「教職教養、一般教養、教科専門」 面接試験
神奈川県	中学校英語	38名	筆記試験「教職教養、一般教養、教科専門」 論文試験
	高等学校英語	80名	
埼玉県	中学校教諭	500名	筆記試験「教職教養、教科専門」
広島県	小学校	310名	筆記試験「教職教養、一般教養、教科専門」
北海道	小学校	400名	筆記試験「教職教養、教科専門」
愛媛県	小学校	190名	筆記試験「教職教養、教科専門」 面接試験

第一次試験は、筆記試験を中心に行われますが、その内容には、「教職教養」、「一般教養」、「教科専門」などの分野があります。また、自治体によっては、一次試験から面接試験、論文試験等を実施するところもあります。

参考として、筆記試験の概要を補足します。

教職教養

教職教養の試験では、教職に対する基礎知識が問われます。具体的には、教育法規、教育方法、教育課程、学習指導要領、教育心理学、教育史、道徳教育、人権教育、特別支援教育、インクルーシブ教育、生徒指導、中央教育審議会の答申、文部科学省等の通知文・報告書などです。

一般教養

一般教養の試験では、国語、数学、理科、社会、英語、芸術、体育に関する問題、情報処理に関する問題、受験する自治体に関係する問題など、出題範囲は多岐に及びます。したがって幅広い見識が必要になります。

教科専門

教員の適性の一つとして、「専門性」が重視されています。筆記試験の中でも、教科専門の配点はウエートが高く、専門で高得点をマークすることが、合格ラインを突破する基準となります。教科専門は、その科目の知識と学習指導要領、指導法等を問う問題が出されます。教科の知識、授業で正確に指導できる力などが問われます。

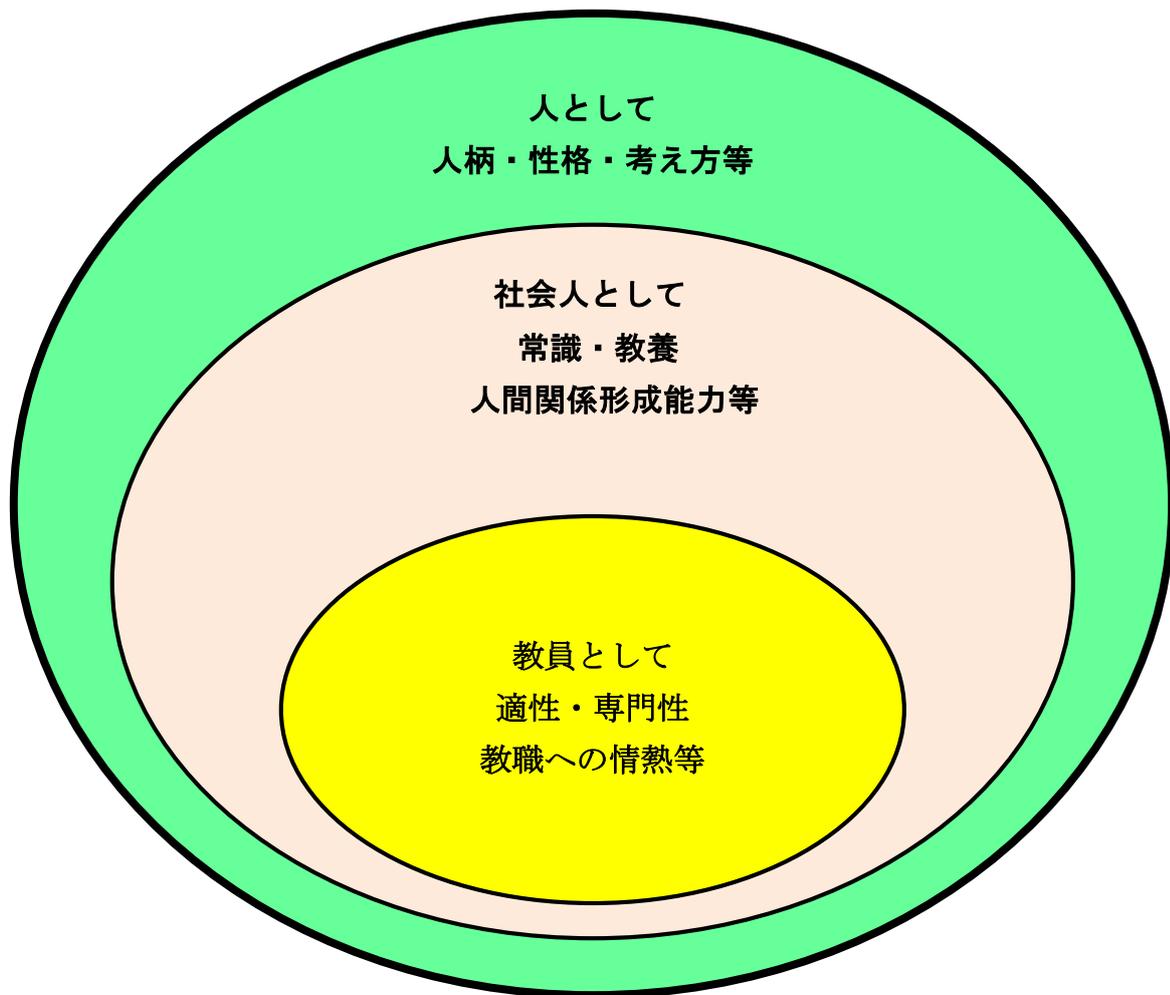
論文試験

採用試験における論文は、大学入試の論文などと同じように考えることはできません。採用試験の論文は、論文的な論理性に加えて、「熱意」や「思い」を込めることも求められるからです。留意点としては、①序論・本論・結論の3段構成で書くこと、②テーマに対する具体策を書くこと、③評論家ではなく教員の立場で書くこと、④「書く面接」と意識し、使命感や情熱を込めて書くこと、などがあります。論文のテーマとしては、教育問題に関して幅広く出題されます。

面接力・模擬授業力向上を目指す：その1

受験者の皆さんの重要な課題の一つに、面接力や模擬授業力の向上があげられます。そこで、今月号から数回にわたり、その課題解決のための資料を掲載します。今回は、その1として、「面接評価の視点」、「面接評価のポイント」について紹介します。

1 面接評価の視点



2 面接評価のポイント

- (1) 教師になりたいという情熱度
教師を志望する動機の強さ、児童生徒への教育的愛情の深さを、前面に出して応答する力が重要である。
- (2) 誠実さ・責任感・協調性
教育に対する使命感や情熱に、裏打ちされた応答が重要である。誠実さ・責任感・協調性などを感じさせる発言が求められる。
- (3) 話す力・表現力
言語の明瞭さ、話す速さや声量、敬語の使い方などに留意することが重要である。また、話に一貫性があるか、簡潔にまとめているか、説得力があるかなどの表現力を身に付けておくこと。そのためには、日頃から課題意識をもって、教育問題等を考えておくこと。
- (4) 教育公務員としての態度・礼儀
教育公務員としての落ち着き、礼儀正しさ、表情の好感度、謙虚さが求められる。また、服装、髪型など、適切な身だしなみが重要である。日頃の受験者の有り様が出る場合がある。

道徳の教科化に思う！（シリーズ49）

平成29年の6月号から、「道徳の教科化に思う」をテーマに、道徳授業の本質的な在り方等について連載しています。今回は、「教材・なおとからのしつもん・指導資料その1」として、本教材の見方・考え方についてまとめました。

1 教材名「なおとからのしつもん」

2 出典「教科用図書」
光村図書

3 対象学年
小学校3年生

4 ねらい 内容項目B－（12）「公正、公平、社会正義」

自分の好みや利害によって、他者に不合理に接する人間の弱さに気付かせながら、それを乗り越え、誰に対しても分け隔てなく接しようとする態度を育てる。

5 教材内容（概略）

本教材は、児童の日常で起こりがちな場面が描かれている。描かれている場面は、次の2つの場面である。

① 席替えの場面（仲良しの友達とそうでない友達が隣になったとき）

仲良しの「じゅんや」には「やった。」と喜ぶが、あまり話したことの無い「ひろし」には「ええっ、やだなあ。」と思わず声を出してしまう。ひろしは、悲しそうな顔をしている。

② 休み時間の場面（優しい友達と意地悪をされた友達を遊びの仲間に入れるとき）

いつも優しくしてくれる「ほなみ」には「いいよ。」と言うが、以前遊びに入れてくれなかった「ゆかこ」には「だめだよ。」と断る。

このことから、主人公の「ぼく」は、「なおと」に、人によって態度を変えることはいけなさと注意する。これに対して、「なおと」は、なぜ人によって態度を変えたらいけないのかと問い返す。主人公の「ぼく」は、返答に困る。

6 教材の見方・考え方

教材の中には、主人公「なおと」が人によって態度を変える言動と、友達からの指摘に疑問をもつ姿が、短い文章構成の中で描かれている。「なおと」の質問「なんで、人によってたいどをかえたらだめなの？」に対しては、多くの児童が就学前から至極当たり前のこととして、「みんなにやさしくしましょう。」などの指導を受けてきたことから、答えることができると予想される。しかし、実生活においては、自分の好みや利害によって、相手への接し方を変えた経験をもつ児童がほとんどである。

本教材を活用する際には、これらのことを踏まえ、次の指導のポイントをおさえたい。

(1) 中心となる問題場面を明確にすること

教材にある2つの場面で、「なおと」の対照的な言動が見られるが、教材の通り「なおと」が接した相手の快・不快の感じ方で分けてみると、最も注視したい言動が明確になる。それは、「ひろし」への言動である。「ゆかこ」も不快な気持ちにはなるが、理由「遊びに入れてくれなかった。」がはっきりしている。しかし、「ひろし」については、「あまり話したことがない。」という理由だけで、彼に対する人としての印象を感じて発した言葉「ええっ、やだなあ。」のように受け取られる。「ひろし」は、「自分はいやがられている。」と受け止め、不快というよりも、悲しい気持ちになることが考えられる。人によって態度を変えることで、相手を悲しい気持ちにさせることは問題であり、「なおと」の「ひろし」への言動を中心として、授業を展開したい。

なお、教材の中では、「なおと」の言動に対する「ひろし」の気持ちなどは、言葉では表現されていない。「ひろし」の困った表情でその気持ちを考えることになるが、教師が教材分析において、「特に深刻に考えていないのではないか。」などと解釈すれば、本時の「ねらい」に照らして、本教材を活用する意味はなくなるものとする。

(2) 形式的な指導にならないよう工夫すること

先述した通り、「なおと」の質問「なんで、人によってたいどをかえたらだめなの？」に対しては、多くの児童が答えられると予想する。ここで大切なことは、「相手がどうしようもなく悲しむ。辛くてたまらない。そんなにいやがられているのかと悩む。」など、相手の心の痛みまで引き出し、心情的に考えさせることである。

そのための発問としては、「理由もなく『ええっ、やだなあ。』と言われた『ひろし』は、どんな心でいっぱいになったでしょう。」「『なおと』にしてみればいやなのだから、しょうがないと思いませんか。そんなに気になる言葉ですか。つい言うことも、あるのではないですか。」などが考えられる。特に後者は、「なおと」を弁護する補助発問として投げかけることで、自分との関わりの中で「なおと」の言葉を考えさせ、人間の弱さに気付かせながら、「ひろし」の心の痛みに気付かせることを意図している。

また、その場に居合わせた友達の気持ちについても話し合わせたい。いじめ問題の解決には傍観者の中に、一人でも多くの仲裁者が出てくることが求められる。何も考えず言葉を発する「なおと」に、同調する周りの友達が出てきた場合には、いじめ問題につながっていくことは十分に考えられる。授業では、「もしみなさんが、それを見ていたら、どんな気持ちになりますか。」などを問いかけ、いじめのない楽しい学級であるために、大切な心についても話し合いたい。更には、児童が主体的に学習に取り組むための手立てを工夫する。具体的には、課題「どうして人によってたいどをかえたらだめなのか、みんなでいろいろ考えて、『なおと』くんの心につたえてあげましょう。」などを設定し、児童が、公正、公平の価値を「なおと」に気付かせていく学習過程を計画する。これは、学習者としての児童が、「なおと」へ助言するプロセスを通して、ねらいとする価値に、アプローチすることをねらうものである。

短い文章構成の教材であることを生かし、創造的に指導方法を工夫したい。